
魔王になりたい

タナトスの鎌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

No.1 召喚されました。(前書き)

7月20日に、加筆、修正しました。

修正前(と言っても一日経っていませんが、)をご覧になった方はすみません。より良くなっているはずなので、どうかもう一度ご覧ください。

爆傷さんの的確なアドバイスをいただきました、本当に本当にありがとうございます。

ズボラで忘れっぽい作者ですが、どうか、見捨てないでください。

No.1 召喚されました。

「魔王を倒してください。」
は？

啞然とする私に、巫女っぽい人（何、コスプレ？）がやってきた。私がいるのは石づくりがむき出しの、地下っぽいところ。はつきり言って、暗いし、かび臭いし、売りに出しても百年が買いてがつかなさそう。

足元にはなんか魔方阵が書いてある。そして青白く光っている。（超きもい。）

「あなたは召喚されし、勇者なのです。」
周りを見渡すと、偉そう人がいっぱいいる。

で、その格好は中世のヨーロッパ風。（首に変なヒダヒダが付いてるって言えばわかるだろうか。）でも微妙に違う。

「お願いします。」

で、こいつ。同じく、中世のヨーロッパ風の格好をしている。そして変なアクセソリーをジャラジャラ付けていて、どちらが本体か分からなくなったケータイによく似ている。（仮装大賞に出れば？w w w）

そして更に、口調は下手だが、『断るわけないよね、だって私のお願いだもん』オーラが見え隠れしてて、正直ウザイ。頼み事するときには頭下げろ。

「ううううう。」

「ここはコラルド王国、あなたのいた場所とは別世界に存在しています。」

「もしかして魔法あり？」

「ええ、まあ」

『こいつ、頭大丈夫かしら』って思ってるでしょ！。わかってるよ！。

「で、私なんだったって？」

「あなたは勇者様です。」

「いえ、私は邑閻 涼です。」

「ユウヤミ・リヨウ様ですか、でもあなたは決まりによって召喚されし勇者なのです。」

わあ、すごいね。(他人事)

「お願いします、魔王を倒してください。」

「(´・`・´)(ヤダ」(即答)

頭下げろや。まあ下げても聞かんけど。(笑)

(そこそこ偉い人みたいなので、頭なんて下げたことないんだろうが。)

「つつ」

「だるい。めんどい。かつたるい。」

「魔王を倒さないと元の世界には戻れないんですよ!!」
脅してきたよ〜怖いよ〜(笑)

「別にいい。」

周りがみんな啞然としている。

「それに！魔王は沢山の人を殺してるんですよ！」

「へー（、）；（ソウナンド）」

「あなたは何も感じないんですか!？」

「この国は戦争やったことある？」

「？」

「この国は戦争をやったことがあるかって聞いてんの。」

「?ええ。」

「じゃあ一緒じゃん。」

「!？」

「戦争で沢山の人を殺したでしょ?それで自分がやられたら被害者面？」

「.....」

「さつさと滅ぼされやがね。」

私が論破していると、扉（壁に溶け込んでいて、今の今まで気が付かなかった）が開いて、若い兵士が飛び込んできた。

「たっ、大変です!魔王が城にやってきました!」

No.1 召喚されました。(後書き)

いきなり大ボスとの対決。WWW
ここからの展開が作者にも不明。WWW

No.2 魔王にならなきや。

「たっ、大変です！魔王が城にやってきました！」

同じことを二度言っな。

「巫女様、ここは私に行かせてください。」

そう言っ出てきたのは、金髪の男だった。

男といっても20才前後で、顔は中の上くらい。いかにも騎士といっような銀の鎧を着ている。

「ケリル！」

そのケリルと呼ばれた男は、私を見ていった。

「こんな奴に任せておけません。」

カチンときたよ〜ウザイよ〜こいつ〜殺すこと決定！

ケリルはガチャガチャとバカっぽい金属音を鳴らしながら、出口ま
で歩いていった。

しかし、扉に手をかけると、振り向いて言った。

「巫女様。」

「……………なんですか？」

「……………いえ、魔王を倒してから言います。」

キタ（。。。）！

さっしのいい読者は気づいていっると思っが、あえて言おう！死フラ
であると！

どうやら神様は味方らしい。

私が心の中で小躍りしている間に死亡フラグの立ったやつ（通称：死体www）は、いなくなっていた。
さらば、死体。（笑）

巫女が私に向き直り、こう言った。

「さあ、あなたも行ってください！」

「いいよ。」

巫女を含め、周りが騒然となる。（おい）

さて、ここで皆さんに私が魔王を倒すことにした理由を言っておこうと思う。

?、けして死体を助けるためではない。

?、私の夢は、国王となることである。

?、おそらく魔王軍では、魔王がリーダーなのだろう。

?、私はこの国が嫌いだ、滅ぼしたい。

つまり、私が魔王軍の頂点に立つ この国を制圧 国王となる。
そのために、私が魔王という存在になる必要がある。それには、現魔王を私が倒す必要がある。ほかの誰でもなく、私が倒さねばならないのだ。

「という訳で、武器ちよーだい。」

「え、あっはい。」

ものすごく驚いていた巫女がなにやら変な呪文を唱えると、80cmほどの2つの箱が出てきた。

1つは不自然なほどに白く、もう1つは恐ろしいほどに黒かった。

そしてそのどちらともに、美しい彫刻がされていた。だからかもしれない、怖く感じるのは、美しすぎるのだ。人ではないものが、一心に彫ったような、完璧すぎる造形美。

恐れおののきながら、私は黒い方の箱を手にとった。

「やはりそちらですか。」
「訳知り顔で巫女が言う。（ほんつとにウザイ。）
ややむかつき、いつもの調子を取り戻した私は、箱を開けた。

そこには、黒いベルベットに包まれた、黒い塊。

私はそれにおそろおそろ手を触れた。
すると、ギョインという音と共に塊が変形した。
思わず箱を落とした私の手にあるのは、

闇のように深い黒の、鎌。

自らの身長よりも長い鎌を持つ私に、周囲は驚きと恐怖の声を上げた。
た。

死神を思わせる武器。

私は笑った、声を上げて、笑った。
だって、ちょうどいいだろう？魔王の武器に。

「さあ、行くうか。」

魔王になるために、この国を滅ぼすために。

No.2 魔王にならなきゃ。(後書き)

ステータス的に最強。

ただいまのレベル、99

やばいな。

次回はかなり、残酷な表現が入ると思います。

ご了承ください。

№.3 侮辱に対する復讐。 (前書き)

早くも、お気に入り登録が！
本当にありがとうございます。

No.3 侮辱に対する復讐。

階段を駆け上がる。

螺旋階段なので、ぐるぐると回る、ウツ目眩が。

段数から察するに、相当地下深くにいたのだろう。

途中途中に廊下とかもあった、
っていつか蟻かよ、お前たちは。

そんなことを思っていると、扉の前についた。

「やっと出口か。」

扉を開けるとそこは………

戦場だった。

広がる空き地に、沸き上がる土埃、瓦礫、

そして人と魔王軍の、死骸、死骸、死骸。

このへんはノーマークだが、血や切り刻まれた肉の香りが漂っている。

15m位のところで、殺し合いが起きている。

見ると死体（ケリルです。by作者）がゴブリン的なもの3体と戦っていた。

そこまで走っていき、ゴブリンに向けて鎌をひと振り。

と、ゴブリンA、B、Cの首がほぼ同時に切れた。

一気に、血が噴水のように溢れ出す。

その色は、^{あか}紅かった。

私はそれを浴びる。
視界が紅^{あか}くなる。

ふと横を見ると、
死体が、瀕死の状態だった。

「た・・・頼みが・・・ある。」

「なんだい？」

「あの方に・・・巫女様に・・・伝えて・・・くれ・・・。」
「何を？」

「・・・愛して・・・いると・・・。」

私は笑って言った。

「・・・やだね。」

死体は絶望の表情を浮かべた。
私は死体の首を切る。

紅^{あか}い血が、再び私の体を染めた。

NO.3 侮辱に対する復讐。 (後書き)

誤字・脱字、問題点がありましたら、どしどしコメントをください

No.4 殺し合える相手。(涼)

振る、切れる。振る、切れる。
モンスターを、私は殺している。

振る、切れる。振る、切れる。
ただ魔王に向かって一直線に、

振る、切れる。振る、切れる。

もう何匹殺したか分らなくなった頃、

キーン

澄んだ金属音が響きわたり、同時に鎌が動きを止める。

目の前に現れたのは、漆黒の剣を持ち、漆黒の鎧をまとった騎士。

「下がれ。」

騎士が言う。低い、よく通る声。

「嫌だ。」

私が言った。

「もう一度だけ言う、下がれ。」

「何度だって言ってる、嫌だ。」

「……そうか、」

騎士は一呼吸おいて、言った。

「ならば死ね。」

速い。

一撃が、連撃が、動作の一つ一つが、速い。

でも、

私は思った。

見切れないほどじゃない。

「君の名前はなに？」

「ロサ、ロサ・テネブラエ。魔王軍騎士団、団長だ。お前は？」

「私の名前は、リヨウ・ユウヤミ。」

「“リヨウ”か、覚えておこう。」

「そりゃどうも！」

ギンッ

「なかなかの腕前だ。魔王軍に来る気はないか？」

「はっ、冗談。」

ガッ

「私が魔王になるんだよ。」

No.5 殺し合える相手。(ロサ)(前書き)

前回の話のロサ視点です。

No.5 殺し合える相手。(ロサ)

振る、切れる。振る、切れる。
人間を、私は殺している。

振る、切れる。振る、切れる。
ただ魔王様のため、一心に、

振る、切れる。振る、切れる。

もう何人殺したか分らなくなった頃、

キーン

澄んだ金属音が響きわたり、同時に剣が動きを止める。
目の前に現れたのは、闇のように深い黒の鎌を持った娘。

「下がれ。」

私が言う。

「嫌だ。」

娘が言った。澄んでいて、でもどこか暗い声。

「もう一度だけ言う、下がれ。」

「何度だって言ってる、嫌だ。」

「……そうか、」

私は一呼吸おいて、言った。

「ならば死ね。」

速い。

一撃が、連撃が、動作の一つ一つが、速い。

私は久しぶりの対等な相手にゾクゾクした。

「君の名前はなに？」

私は答える。

「ロサ、ロサ・テネブラエ。魔王軍騎士団、団長だ。お前は？」

「私の名前は、リヨウ・ユウヤミ。」

「“リヨウ”か、覚えておこう。」

「そりゃどうも！」

ギンツ

「なかなかの腕前だ。魔王軍に来る気はないか？」

本心だった。彼女ほどの者が我が軍に加われれば、さぞ心強いだろう。しかし、彼女は断った。

「はっ、冗談。」

ガッ

そして笑みを浮かべて、こう言った。

「私が魔王になるんだよ。」

No.6 魔王に会いました。撤退されました。(前書き)

お気に入り件数が、2桁に!!

皆様、本当にありがとうございます!

No.6 魔王に会いました。撤退されました。

「……嘘だろ？」

ロサがひきつった笑みを浮かべる。

「いいや、本気さ。」

ガキーン

「たとえお前が魔王となつたとしても、人はついてこんぞ？」

「忠誠心が高いのはね、でも。」

ゴッ

「力に従っているだけの者はついてくるでしょ？」

「それは否定しないが、それでお前が手に入れるのは、カス以下の軍だぞ？」

「そうだね。だから強くて忠誠心が高いものは……」

ガッ

私は笑つて、言った。

「死体にして操る。」

魔法の世界なら、あると思った。死体を操る方法ぐらい。だけど、

「死霊操り（ネクロマンスト）か。」

ロサが苦い顔をして言う。

本当にあつたのか。何でもありだな、おい。

「ああ、そうだよ。」

「確かに、お前ほど魔力があるものなら扱えるかもしれん。」

ギンッ

「お前をここで確実に殺しておかねば。」

ザッ

間合いを開けたロサの顔から、一切の表情が消える。

ギユ

鎌を握り直す。

そして必殺の一撃を加えようと、足を踏み込んだ瞬間。

「待て！」

大声が響いた。

その一声で音がやみ、

人が動きを止め、

化け物が動きを止め、

土埃さえ静まり、

私は止まり、

ロサも止まり、

世界のすべてのものが、

その声の方向をむいた。

「……魔王。」

誰かがかるうじて、そう言った。

その男は三十歳前後に見えたが、百年生きた老人のような風格を持っていた。整った顔立ちと、背中から生えたコウモリの羽。その声はマグマのように強く、太く、暖かった。

「これより、魔王軍は撤退する。」
響きわたる声。

「グズグズするな！撤退だ！」
モンスター達がハツとし、行動にうつした。

ほんの5分前まで戦場だった場所には、
がれきと、死体と、
呆然としている人だけが残された。

№・6 魔王に会いました。撤退されました。(後書き)

感想、コメント、お待ちしております。

No.7 復讐神話

むかしむかし とある国に

ひとりの女がいた

女は闇のようにふかい黒の鎌を持っていた

女はばんぶつの命をかることができた

しかし女はそれをしなかった

女は全てのものを ふかくふかく 愛していたから

ところで 女は神の命をかることもできた

女がいつか自分たちの命をかるのではないか

神々はそうおもい 女を異世界についほうした。

ついほうされる直前 女は いった

「私が百度生まれかわっても

けして恨みはわすれない

うまれかわって百度目に

この世界にやっけてきて

そのじだいの魔王とともに

かならずいつか殺してやる」

のこされた鎌をふういんした神々は

女が復讐にくるのではと 今日も天上でおびえている

No. 8 魔王城にて。(前書き)

一部変更しました。

最後の魔王のセリフがキャラじゃないので変えました。

No. 8 魔王城にて。

暗い色で統一された美しい部屋で、
どんと机を叩く音がする。

「どうして撤退命令を出したんです!？」
ロサが言う。

その声は誰の耳にもいらついていることが分かる。

「……落ち着け。」
銀髪の青年が言った。
彼は白と黒のマントを羽織っており、
金色の目でロサを見た。

「モンドの言うとおりですよロサ、落ち着いてください。
貴方らしくありません。」
ピエロも言う、
不気味な半仮面をしていて、
鮮やかでどこか狂氣的な縞模様の衣装を着ている。

「コルヴィス!私は!」
「はい、深呼吸〜」

言われるままに深呼吸するロサ。

「魔王様の御前ですよ、落ち着いて喋ってください。」
「どうして撤退命令を出されたのでしょうか?」
「まだ時ではなかった。どうやら私は先走る癖があるらしい。」

問われた者

魔王は言った。

「時とは？いつですか？」

「あの女の生まれ変わりが、この城に来た時だ。」

「生まれ変わりととは？いつたい誰です？」

「お前と対等に渡り合った相手だ。」

「！？」

ロサが驚愕を顔に浮かべる。

「ちょ、ちょっと待ってください。」

「コルヴィスが口を挟んだ。」

「誰ですか？ロサと対等だなんて。」

「・・・詳しく知りたい」

モンドも口を開いた。

「私もあの娘については、名前以外分かっていません。」

魔王様は何か知っておられるのですか？」

ロサが聞く、

魔王は頷き、静かに口を開いた。

「お前たち、復讐神話は知っているな。」

「ええ、確か異世界に追放された女の話ですよ。」

「いつかこの世界に戻ってきて、神々に復讐するといっ。」

「ああ、魔王わたしとともにな。」

「つまり、リヨウが女が百度生まれ変わった姿だと？」

「リヨウ？」

「コルヴィスが尋ねる。」

「その娘の名前だ。」

「ふん」

「しかし魔王様、リヨウは魔王様を殺し、
自らがその座に就こうとしているのですよ?」

「……なんだって?」

モンドが殺気を帯びる。

「落ち着け。」

「……はい。」

魔王の言葉で冷静になる。

「ふむ……まずは様子見だ。

敵かどうかはそれから判断しても遅くはあるまい。」

そして魔王は鋭く言った。

「解散!」

それぞれが自室に戻る。

紅い月が、崖の上の魔王城を、
美しく照らしていた。

No. 9 ウザイ夢とウザイ王様 (前書き)

更新が遅れました。すみません。

No. 9 ウザイ夢とウザイ王様。

泣き声がする。

子供だ。

私は銃とナイフを持ち、

泣きじゃくる子供の前に立った。

子供は五才くらいで、

典型的な日本人の外見だった。

「どうしたの？」

「・・・死んだの。」

「誰が？」

子供が無言で指し示す方向を見ると、

おそらく子供の両親であろう、

男女の死体が転がっていた。

「可哀想に。」

そう言って、私は子供を銃で撃った。

）・・・）

目覚めると、天井が見えた。

ここはどこだったっけ、

・・・。。。

思い出した。

私がロサと対等に戦ったり、

(ロサは魔王軍三大幹部ってやつの一人らしい。)

魔王が撤退したりして、私は本格的に“勇者”となった。

それでしこたま飲まされ、しこたま食わされたのだ。

もちろん、飲まされたのはジュースなんかじゃなくて、酒。未成年なんだぞ、おい。

・・・思い出したらイライラしてきた。

「あーたつく！」

バシツと枕をドアに叩きつける。

と、空いたドアが誰かにクリティカルヒット！
倒れる音がした。

「お、王様！」

「王様？」

ドアの外を覗くと、

太ったおっさんがぶっ倒れていた。

No.10 おっさんの要求(前書き)

PVが、8000人を超えました！

お気に入り件数が、30件を超えました！

夢オチだったらどうしようとかクブルです。
皆様、本当にありがとうございます！

No.10 おっさんの要求

「あーびっくりした。」

そう言つて、ムクつとおっさんが起き上がった。

中年太りで、上等そうな服を着た、

人の良さそうなおっさんである。

「どうかした？」

「いやーいきなりドアがクリティカルヒットしてきてね。」

なるほど、おっさんの顔には

木目模様が刻み込まれていた。

「誰がこんなことを……」

「お前だろ。」

うるさいな、衛兵その1。

わかつてるよ。

「ところでおっさん、誰？」

「無礼であるぞ！このお方をなんと心得る！」

「……水戸光圀公？」

「誰だそれは。」

「いや、こつちの話。」

「この方は、エザリ王国、第28代目国王、カリス・ド・エザリ様である！」

「……王様？」

「うん、王様。」

「ふーん」

「ちよつと！」

おっさんがいきなり大声を出した。

「何？」

「なんでナチュラルに鎌持ってたんの!？」

いや、人質にでも思っ

なんて言えるわけもなく、

冗談だ。とごまかしておいた。

「勇者というよりは、魔王って感じだね。」

「別にそれでかまわないけど。」

私はメイドさんに持ってきてもらった紅茶を飲む
うわっ、あつっ！

猫舌にはきつい温度だ。

「たいていは初めて戦場に出ると、何もできないものだけどね。」

「突っ立ってたら死ぬだけでしょ。」

私は紅茶を吹き冷ましながら言う。

「それに初めてじゃないし。」

「そう。」

おっさんは、ニコニコしながら言った。

「ところで君の得意な武器は何？」

「拳銃とナイフ、あと剣も少しはできる。」

「拳銃？」

「ああ、ここにはないのか。」

鉄の球を鉄の筒で撃つ武器。」

「へえ。」

おっさんの目がキラキラしている。

危ない奴。

「じゃあ、本題に入ろうか。」

「本題？」

「うん、君に兵士たちの訓練をして欲しいの。」

.....

「ばーどらん？」

No.11 交渉成立！

「……なんで？」

「うん、国軍全体の戦力を上げようと思って。」
おっさん（国王）が紅茶を飲みながら言った。

昨日の戦闘で、ゴブリンに負けた奴らの訓練か。
「めんどい。」

あいつら相手なら向こうが百人いても十秒かからずに殺れる。
そんなのの訓練なんて無駄だ、無駄。

「断るよね、予想してたよ。
そついうキャラだもんね。」

じゃあ頼むなよ！！！！！！（魂の叫び）

「でも、聞いてもらえないなら、強行手段に出るしかないね。」
「へえ、どんな？」
「捕獲、拷問、幽閉。」

さらっと言いやがった！こいつ！お前は変態か！

「抵抗するよ？」
「その犠牲の分だけ、ほかが強くなればいい。」
「……」

「それに抵抗した時点で、君はこの国の敵だ。」
そっちの方がよっぽど面倒くさいよ？

おっさんは、ニコニコしながら言った。

「私が魔王に下つたら、どうすんの?」

「それは無理、君ロサと戦っちゃってるし。」

「あんたの首を持っていけばいいんじゃない?」

驚いた表情で、衛兵が私に槍を向ける。

「そうすれば?」

おっさんは、ニコニコしている。

その顔には、恐怖など微塵もない。

衛兵が守ってくれている安心感?

違う、私が衛兵をすぐに倒せることを知っているはず。

じゃあ、なぜ?

私は恐怖を覚えた。

この人にはきつと永遠に勝てない。

そんな気がする。

「どうしたの?」

「……訓練を手伝うことによって私が得るものは?」

「そうだねえ。お供と現金、あとはどこの国でも使える身分証明証」

パスポート

「具体的な金額は?」

「100金貨」

この世界のお金は、銅貨×100000＝銀貨×1000＝金貨×1

銅貨1枚＝50円くらい

「1000金貨」

「お供も付けるんだよ?15金貨」

値切るなよ、王様。

「そいつらの分も必要だろ？90金貨」

「彼らには彼らでもたせる。25金貨」

「その分もよこせ。80金貨」

「魔道書、ビュウダーケブック“真の闇の書”も付ける。35金貨」

「なにそれ。70金貨」

「闇魔法の全てが書いてある本。40金貨」

「ふーん。65金貨」

「いる？いない？45金貨」

「まあ、いるかな。50金貨と80銀貨」

「じゃあ、交渉成立だね。」

明日からよろしく！

そう言っておっさんは出ていった。

はあ、台風みたいな人だ。

No.11 交渉成立！（後書き）

最近更新をサボリ気味ですみません。

言い訳させていただきますと、

？学園祭の台本を書いていた。

？学校が30日まであった。（マジです。）

？台本が面白くないと言われて、傷心気味だった。

まあ、マジでいいわけです。

すみません。

No.12 **まずは顔合わせ。** (前書き)

小説の得意技！

あれから…・

はい、という訳で前回から一週間後です。

ほんとに適当ですみません。

No.12 まずは顔合わせ。

「ああああああだるいいいいいいいい
ほんとに見どころのない奴の訓練は疲れた。」

簡単に一週間の訓練内容を言うと、

一日目、全員を相手に棒切れ一本で戦闘。
三十秒で殺^ヤる。

二日目、全員に筋トレをさせた。

サボろうとしたやつを全力でのした。

三日目、全員に筋トレをさせた。

サボろうとしたやつを全力でのした。

四日目、全員に筋トレをさせた。

サボろうとしたやつを（以下同文）。

こんな感じ。

毎日必ず、サボろうとする奴がいて、

そいつらを全力で、死なない程度にのす。

七日目は参加できる人数が四分の一になった。

王様に、

「レベルが違いすぎたし、君、人に教える人物じゃない。」
と、言われ、訓練終了。

「あんな奴らなら、お供無いほうがマシ。」

私が言っと、

「うん、あいつら雑魚だから、人間版スライムだから。」
と、王様は返してきた。

ああ、どうりで。

「とりあえず、君のお供を紹介するね。」

お供って名目だけど、まあ仲間だから。」

そのつもりでね〜と、王様は私を小部屋に案内した。

なかには、

エルフ耳の可愛い女の子、10才くらい。

なんだか巫女さんと同じような格好をしているけど、

あの人の付けていたジャラジャラしたアクセサリーはなく、
六芒星(?)の付いた杖を持っている。

と、

綺麗な青い髪をした青年、年は私と同じくらいかな？

多分、18才前後。

髪と同じ青色の鎧の上から、マントを羽織っていて、

とてもいい感じ。

まあ、好みじゃないけど。wwww

あとは……

うん、この人(?)が問題。

黒い外套を着ていて、黒いブーツ姿。

いいセンスしてる。
胸から下がる銀の十字架は、
キリスト教徒というよりファッションだな、きっと。
そういえば、この世界にキリスト教なんかがあるんだろうか？
話がずれた。

で、彼の顔はというと、

.....

犬です。

カンペキな。

「獣人？」

「ああ。」

犬の人が言った。

「私は名前をトゥルム・シュピーゲルという。よろしく。」

そう言っつて、ニヤツと笑い、トゥルムが手を差し出した。

「よろしく。」

私もニヤツと笑って握手する。

「わたしは、リーベ・キルシエです。よろしくお願ひします！」

エルフ耳の子 リーベ が、お辞儀をしながら言っつ。

「よろしく。」

今度は爽やかに微笑んで言っつた。

「俺はバルト・ヴァッサーだ。よろしく。」
青い彼が言っつ。

お辞儀も握手もなし。
ノーアクション。

「よろしく。」

私はいつもの笑顔で言った。

そつえば前の世界で誰かにこの笑顔を向けたら、

『悲しそうな笑顔だ』って言われたな。

「さあ、顔合わせ終了だね。」

そう言つて王様は外に出て、ドアを閉めた。

カチャリと鍵がかかった音がした。

No.12 **まずは顔合わせ。**（後書き）

クラスメイトの一人にバレました。
Mさんです。

残酷描写、無理と言われました。
じゃあ見るな。

No.13 リアル脱出ゲーム。

スタスタスタスタ

ぎゅっ

ガチャ。

ガチャガチャガチャガチャガチャ……………

「ふざけんなあああああ!!!」

鍵かけやがった!あのおっさん!

殺す!出たら絶対殺してやる!!

「壊れるぞ。」

バルトが言う、

「壊そうとしてるんだよ!」

「なるほど、本当に王様は面白いな。」

トウルム!クスクス笑ってる場合じゃないんだよ!

「どうしましょう?」

リーベはオロオロしている。

「うーん、鎌は置いてきてるし。」

「俺が切ってみようか?」

「うん、バルト。やってみて。」

バルトの剣は、スラリとされていて、とても綺麗だった。
つかの部分についた青い宝石が、優しく光る

「はっ」

ガッ

辺りに鈍い音が響き、剣が空中で止まっている。

「どうしたの？」

「何か、硬い壁があるようだ。」

ゴソゴソゴン

「無駄だよ。」

トウルムが言う。

「おそらく、攻撃防御魔法だろう。鍵がなきゃ解けない。」

「鍵があつたら普通に開けるよ。」

「だろうな。」

クスリと笑う。

「とりあえず、そのへんを漁るか。」

この部屋は、一つのダンスと、いくつかの椅子。

あと、机と箱。

ゴソゴソゴソゴン……………

「何も無いぞ。」

「こっちもです。」

「ここもだ。」

「あと調べてないのは、」

はい、箱です。

何か嫌な感じなんだよね、この箱。

真っ黒で、丁寧な彫刻がある。

あの鎌の入っていた箱のような、

人は決してたどり着けない、

たどり着いてはいけない。
そんな領域に入る、
造形美

「まあ、開けてみるか。」
カポ。

なんとも間抜けな音とともに、箱があいた。

No.14 魔道書と御対面。

綺麗な装丁のされた本。
真っ黒。

何で私の選んだものは黒いんだ……。
いや、まあ、好きですよ？黒。

「おお、それは。」

トウルムが言う。

「なんか知ってるの？」

「知ってるも何も、

それは持主を選ぶとされた唯一の魔道書、
ピュワ・ダーク・ブック
真の闇の書だ。

どうしてこんなところに。」

「ああ、多分王様が置いたんだと思う。」

「？」

「あげるって言ってたから。」

「……あげる？」

リーベがびっくりした顔で言う。

「うん。」

「それ、王家の家宝なんです。」

……

ええええええええええええ

「何か軽いノリだったよ？」

「どんだよ」

と、バルト。

「『兵士の訓練するよ!』『OK!じゃあ魔道書あげよ!』みた
いな!」

「「「軽っ!」「」

はもった!

「まあ、君が使いこなせるとは限らないし。」
犬の人が言った。

「どういうこと?」

「さっきも言っただろう?“持ち主を選ぶ”と。」

「つまり、この本が私を拒否して、使えない可能性がある。」

「そういうことだ。」

何だってええええええ

「でも、なんか相性いいみたいだし、いけるんじゃないか?」
「いや!いけるとかそういう問題じゃないと思う!」

君たちのノリの軽さも王様といい勝負だ。マジで。

「とりあえず、魔道書に名を名乗れ。」

「そついえは俺たちも名前聞いてなかったな。」

「勇者様の名前はなんというのですか?」

勇者様……

その言葉がとても重く押し掛ける。

「私の名前は、リヨウ。リヨウ・ユウヤミ」

私がそう言い、本に触れた瞬間。

あたりが真っ暗になった。

No.15 真っ暗な闇の中で。

目の前全部

黒。

っていうか

闇。

「何も見えねー」

声が闇の中に消えていく。

自分の手のひらも見えない。

でも不思議と怖くはない。

次の瞬間

ものすごい暴風と共に、

羽をバツサバツサといわせて、

カラスが来た。

はい、ここで疑問点。

「なんであんたの姿が見えんの？」

私は鼻先にある自分の手のひらも見えない。

でも目の前にいるのが少なくとも2mはある

大ガラスだという認識ができる。

「私の世界だからな。」

頭の中に直で話しかけんな！この鳥類！

「私の声帯は人とは異なる。
よって、このような形でないと、
人との会話が成り立たない。」

人の頭の中読んでんじゃねーよ！

「仕方ないだろう。そういう能力なのだから。」

どなんだよ！

「私はここに来た全ての者の心がわかる。
だから知っているよ。貴様の野望も。」

それなら話が早い。

「さつさとその魔法とやらを教えろ！」

「ああ、いいだろう。」

マジ話が早いな。普通こういうのって、
『ならば貴様の覚悟を見せてもらおうか。
っていう展開になるんじゃないの？』

「そんなめんどくさいことはしない。
そもそも心を読んだ時点で、
貴様の覚悟もわかった。」

なるへそ。

「だが、この知識に、貴様が耐えられるかな？」

そう言うと、カラスは笑った。
鳥が笑うなんてありえないのだが、
確かに笑ったのだ。

そして私の体の中に、
何かが大量に押し寄せてきた。
私は気を失った。

No.16 気がつくところは……(前書き)

我ながら、内容とタイトルがかみ合っていなかったので、変更しました。

No.16 気がつくとそのは……

………「どこ、どこ？」

真っ白な壁

じゃなくて天井か。

「おい！目を覚ましたぞ！
バルトの声がする。」

私は起き上がった。

何か脱出したみたい、
部屋は清潔感のある、
結構広めな部屋になっていて、
私はそのベッドの上で寝ていた。

「大丈夫ですか！？」
リーベ。

「もう起きないかと思ったよ。」
トゥルムが苦笑して言う。

「アハハ、もう大丈夫。」

「寝とけ。」

「いや、ホントに大丈夫だから。」

「……！？」

ん？皆がびっくりしている。

「どうした！なんで泣いているんだ？」
「え？」

バルトに言われて、
初めて泣いていることに気付いた。

ああ、そうか。

「嬉しいんだ。」

「何が？」

「心配してもらえて。」

前の世界ではありえなかった。
誰かが、自分のことを、
心配してくれるなんて。

「なにやら君は面倒な世界じこから来たみたいだね。」
「うん。」

二度と戻りたくない。

もう二度と。

あんな世界じこには。

「それにしても目を覚ましてくれてよかった。
あのあと急に消えちゃうし、
出てきたときには気絶してるしで、
トウルムさんが結界ごと扉を壊したんですよ。」

は？

「トウルム、壊せたの？」

「ああ。」

「じゃあなんで最初の段階で壊さなかった！」

「面白そうだったから。」

「コノヤロー」

顔色一つ変えないか。

「お前、丸二日眠っていたぞ。」

「マジスカ」

寝すぎだろう、私。

「それで、何か知識は手に入れたのか？」

「あ、うん。何か大量に。」

「何か使ってみてくれないか？」

トウルムの目がキラキラしている。

こいつも危ないやつだな。

でも、何が使えるかはまだ調べてないし。

何か一個やってみますか。

「影レリエルの使役！」

と、その場にいた全員の影と、

その場にある全ての物の影が、

私のところを集まった。

「これは」

「すごいな」

「あわわわわ」

と、影を盗られた人たちの感想。

うーん、緊迫感ってものがない。

ていうか、ナニコレ。

ゲッコー・モア？

別に死体に突っ込んだり出来ないが、影を自由に操れる魔法らしい。そんじゃま、使ってみますか。

「バルトの影よ！剣を抜け！」

影に命令を下す。

すると、影がその通りに動いた。

「うわああああ！」

バルト本体も、その通りに動く。

ゲッー・モリアじゃん。

影 命じゃん。

「影よ！正しき主人のもとに帰れ！」
はい、これで元通り。

「あれ？」

私は壮大な疲労を感じ、
そのまま、また気絶した。

No.16 気がつくとそのは………(後書き)

言い訳させてください。

トウルムは、相手のことを『君』と言い、

バルトは、『お前』といいます。

口調が似ているので、なかなか見分けにくいと思います。

じゃあ、変えろよって話ですよ、

本当にすみません

No.17 もっかい目を覚ました。(前書き)

ケータイでのアクセスが6000を超えました！(PV)
こんな駄文のためにパケット代を払っている方がいらっしやると考
えると、感謝してもしきれません。
皆さん！本当にありがとうございます！

No.17 もっかい目を覚めました。

目が覚めた。

窓を見たら、なんか夜でした。

無駄にへこむ。

マジ寝すぎだろう。私。

「ん？起きたか？」

トウルムが読んでいた本から顔を上げた。

もちろん電気なんてないから、ランタンである。

「うん。起きた。」

「大丈夫か？」

「まあ、大丈夫。」

全然体に異常はない。

むしろHP、MPともに全快って感じた。

「そうか。」

トウルムが頷きながら言った。

はあ、しかし魔法一個で気絶って、

私あんまりチートじゃないかも。

「あのさ、あのレベルの魔法だと、

気絶はあんまりないでしょ？」

「ああ、魔力を使い果たすことはあるが、気絶はないな。」
「ですよねえ」

「ただし、術の発生があの部屋だけだったらだ。」

「？」

「あの部屋だけでなく、
この国全体で影が無くなるという怪事件が起きた。」
「……じゃあ、私はこの国全部の影を使役していた？」
「そういうことだ。」
「気絶しなかつたらむしろ化け物つてことが
魔法のコントロールが必要だな。」
「ですね。」

「明日から、全員の本格的な指導が始まるらしい。」
「え？最高峰な人たちじゃないの？」
「リーベは剣術。バルトは治癒魔術だ。」
「ああ、足りないところを補う、と。」

「そういえば、トウルムの職業って何？」
「リーベは魔術師。バルトは騎士だろう。
しかし、トウルムの職業は見当もつかない。」

「私の職業は、^{レコーダー}“記録者”だ。」
「^{レコーダー}記録者？」

トウルムの話によると、
「^{レコーダー}記録者は天が勝手に決めた、
歴史を記録し、そのために不老不死になった人の事だという。」

トウルムの場合は、
「^{レコーダー}記録者に出会い、
その人がもっていたノートを受け取り、^{レコーダー}記録者になったという。」

「頭の中に天の声だっという
綺麗な声が聞こえて、その声の言うとおりに、

受け取りたくもないノートを受け取ったんだ。」

そう言っていた。

「勝手だね、神様ってやつは。」

「いつだってそうさ。」

「俺はもう自分の年もわからない。」

トウルムは苦笑いしていった。

100まで数えて、もうやめたんだと。

「……トウルムは死にたくないの？」

「なるさ。でも、俺が死ぬときは次の記録者が記録者になる時だけ

らしい。」

「……」

「もう少し気長に待たせ。」

私は何か言おうとした。でも、口が動かない。

「さあ、眠くないだろうが、もう一度寝な。」

そう言って彼は部屋から出ていった。

彼が置いていったランタンが、部屋の中を照らしていた。

No.18 いま、なんと？

いま、私は魔力のコントロールの訓練をしている。

最初は剣術をやっていたのだが、バルトに勝ってしまった……かなり落ち込んでいたが、私が励ましてもあれなので、あとでリーベに頼んでおこうと思う。

と、いうわけで。

「影レシエの使役！」

よし、今度はしっかり対象の影だけに力を集中できたぞ。

「四角！」

円柱の積み木の影が、長方形になる。

それに合わせて本体も長方形に。

うん。もろ影革

「影よ！元の主人の元に戻れ！」

はい、OK。

「わあ、すごいですねえ！」

リーベがてちてちと歩いてきた。

……なぜだろう？可愛いのにこんなにむかつくのは。

「私は闇系の魔法はまったく使えなくて。尊敬します！」

ああ、思い出した。

私、ぶりっ子アレルギーだった。

「ありがとう。」

営業スマイル。

仲間だけど、友達になるのは無理。

「リーベ、悪いんだけどさ、バルト励ましてくれこない？」

「何ですかあ？」

.....
^
?

No.19 おっさんはチートだった。

ヘル・ファイヤー
「地獄の炎！」

私の掛け声とともに、黒い炎が目の前のドラゴンに飛んで行く。
と、ドラゴンはその炎を翼で一瞬のうちになぎ払う。

「どうしたの？攻撃に切れないよ？」

切れとかそういう問題じゃねえええええ！

どんなチート設定だよ！

はい、大体の人とは見当がついたと思いますが、
王様は実はドラゴンでした。

新緑のようなつややかで美しいつるつる。

大空を飛ぶための翼。

長くて強靱なしっぽ。

瞳はエメラルドのようにきらきらと輝いている。

そして何よりでかい。

少なくともビルの3階くらいあるぞ。身長が。

「こないならこっちからいくよ？」

そのとたんに緑色の炎が吐き出される。

ブラック・シールド
「黒の守護！」

黒い壁を出し、それに緑の炎が当たる。

と、私はダッシュでドラゴンの後ろに回る。

振られたしっぽをよけて、

カンフレグレイシャーン・ダークニクス
「炎よ、闇を愛せよ。暗黒の業火」

「グッ」

声とともに、ドラゴンがおっさんの姿となった。

「結構やるね。いやー負けたよ。」
あはははは、と王様は笑う。

ここでドラゴンについて、いくつか説明しておこう。
まず、大きさ、姿形はあんまり変わらないらしい。

しかし、うるこや瞳の色は6種類があり、
それぞれの属性となっている。

また、魔法の属性も6種類である。

下は、それぞれに対応する色と、相性だ。

> i 2 8 9 1 0 — 3 5 6 8 <

おっさんは草系だったので、闇＋炎 の魔術で、攻撃した。
うん、コントロールがしっかりとできている実感がある。
少しみんなの様子を見てくるか。

そのころのお供たち（バルト視点）

「ハッ」

「よっと」

汗をかく。

しかしあいつは呼吸一つ乱れない。

「獣人つてのはみんなお前みたいなのかよ!」

「いいや。」

俺が必死に振るう剣を、涼しい顔でよける。

くそっ

何でだよ！何でこんなやつに俺が負けてんだよ！

リヨウならまだわかる。さすがに10秒でやられたのには落ち込
みだけ。

何せ、ロサとやりあう奴だものな。

でも、こんなへらへらしたやつに、

何でだよ！

「何でだよおおお！」

「なぜ君が私に負けているのかって？」

「そっだよ！何でお前なんかに！」

「それはね……」

目の前から奴が トウルムがいなくなる。

「君がそう思っているからだよ。」

首筋に痛みが走り、

俺は気を失った。

No.19 おっさんはチートだった。(後書き)

投稿直後に書き(打ち?)足しました。

No.20 ロサと直属の部下

薄暗いが、過ごしやすそうな室内。
あかりとベット、それから、棚に数冊の本。
広い割に物が少ないのは、住人の趣味だろう。

窓からコツコツと音がする。

「帰ってきたか。」

そう言いながらこの部屋の主人　　ロサ・テネブラエは窓を開けた。

と、鷲が部屋の中に入ってくる。

彼(?)はチムタナー。

ロサ直属の部下であり、

テレパシーが使える数少ない動物の内の一匹である。

魔王軍三大幹部は、一人一匹ずつ、

このテレパシーが使える動物をもっており、

モンドは白狼を。

コルヴィスは黒猫を、それぞれ活用している。

ロサはチムタナーを

涼のいるエザリ王国の城に偵察にやっていたのだ。

「おはようございます。ご主人様。」

チムタナーは、ロサにテレパシーを送る。

テレパシーと言っても、拡張調整ができないので、普通に話し声が聞こえる範囲に入れば、テレパシーを感じることができる。

「おはよう」

「早速ですが、調査結果をご報告いたします。」

チムタナーは、涼が仲間と顔合わせをしたこと、ビュワ・ダーク・ブック真の闇の書を手に入れたこと、

竜化したエザリ国王に勝ったことなどを話した。

「竜人に勝ったのか……」

この世界でいう竜人とは、
竜、つまりドラゴンを倒した人のことである。

この世界の竜は殺されると、その力の全てを殺した相手に渡す。
その渡された相手が、竜人というわけだ。

「未恐ろしいな。」

そう言いながらも、自然に顔がほころぶ口サ。

「今はほとんどの闇魔法を使いこなしています。」

「ほお。」

「彼女自身は気付いていないでしょうが、魔力も日に日に上がって
います。」

「すごいな。」

「今は魔術師団団長のモンド様と同等かと。」

「モンドと？」

「あくまでも、魔力のみの話ですが。」

「異世界の住人は、そんな者ばかりなのか？」

「いえ。そういうわけでは。」

しかし、あちらでの30年ほど前から、

闇属性で、魔力の強い者が増えているらしいです。」

「なぜだ？」

「魔力というものは、おさえようとすればするほど、その力を貯めるものですし、親がなくなれば、その子供に受け継がれるものです。」

おさえ、使われなのままに魔力が子孫へと残され、その結果、魔力が強いものが生まれたのだと思われます。」

「闇属性については？」

「心の闇というものも、おさえようとするほどに強くなるもの。溢れ出した負の感情が、魔力に干渉し始めたのでしょう。」

「ご苦労。私はこれから仕事デスク・ワークがあるから、夜まで好きにしているといい。」

「はい、ありがとうございます。」
ロサは外に出ていった。

「私も行きますか。」

友人に会うために、チムタナーも、部屋をあとにした。

No.20 ロサと直属の部下（後書き）

エラーの嵐でナイーブな気分です。

この話は5回も打ち直しました。

神様、私なんか悪いことしましたか？

No. 21 コルヴィスと黒猫（コルヴィス）（前書き）

だいがあいだが開きました。
すいません。

No. 21 コルヴィスと黒猫（コルヴィス）

「ニヤアアアゴオオオオ!!!」

「わっ」

わたしはびっくりして飛び起きる。

「大丈夫か？」

^{テレビ}バシー
声をかけてきたのは、
黒猫リンクスだった。

「どうやら、うなされていたらしい。」

「はい。ありがとうございます。」

「敬語使いなよ。」

「癖だからしょうがないですよ。」

「むう。」

私は仮面をつけた。

「さあ、行きますよ。」

私は自分に変化の術をかけ、

リンクスを私以外に見えないように術をかけると、
扉を開けて、食堂に向かった。

「おはようございます。」

私は兵士団オルガノ小隊の隊長に声をかけた。

「おお、アヌムか。」

ニコニコしながら隊長は答えた。

私たち三大幹部と魔王様は変化の術を使って、この食堂で食事をする。それぞれにはその仮の名前があるはずなのだが……

正直私は他の人の仮の名前を知らない。

それは他のみんなも一緒だ。

誰が誰だか分からない。

これは、部下いびりをしているものがないかを確かめるためでもある。

で、デスク・ワーク仕事

予算の書類と古文書解読。

リンクスはたぶん

昨日かえって来たチムタナーに会いに行っていると思う。

しかし、昨日の報告には驚いたな。

あのリヨウという娘が竜人のエザリ国王に勝ったとは、急いである作戦を決行する必要があるかな。

今日は魔王様にそのことを進言するか。

No.22 三大幹部たち。(前書き)

キャラクター人気投票をしようと思います。
詳しくはあとがきに書いてあります。

No.22 三大幹部たち。

「と、言うわけで、私はそろそろ、あの計画を実行に移すべきだと思います。」

ここは会議室。(No.8にでてきたのと同じ部屋です。by作者)
魔王に向かって、コルヴィスはそう言った。

「……俺も同感だ。」

「私もだ。」

魔王様、リョウたちがツヴァイ地方に行く前に行動を起こすべきだと思います。」

「すまないが、私はどうして君たちがそこまで急ぐのかが分からない。」

あそこの領主とは約束が取り決められているはずだ。」

「あの馬鹿はもう5回もそれを破っているのです。」

それに対して、報復するのは、当然でしょう。」

「ロサの言とおりで。あのままでは彼はより付け上がります。」

「ふむ……………」

魔王は少し考えたあと、再び口を開いた。

「では、三日後、使いをやるでしょう。」

それでも応じなかった場合は、コルヴィス。頼んだぞ。」

「承知しました。」

「解散！」

ロサ side

「今日は私の部屋に来ませんか？」

コルヴィスは唐突に私とモンドにそう言った。

「そうさせてもらおうか。」

「……俺も行く。」

「どうぞ、かけて下さい。」

そう言われ、私とモンドはソファーに腰掛けた。

コルヴィスの部屋は物が多い。

と、言うよりは、本が多い。

四つの壁のうち、ひとつは天井まで本棚だ。

その横には、

入りきらなかった物が積み上げられている。

種類も

娯楽本・学術書・古文書などなど

統一性がなく、幅広い。

一体どこから集めてくるのだろうか……
謎だ。

「また増やしたな。」

「あ、バレました？」

「……いい加減どっかに捨ててこい。」

「無理です。」

即答かよ……

「ぶっぞ。」

いつの間にか目の前にグラスが置いてあり、
その中にはワインが注がれていた。

No.22 三大幹部たち。(後書き)

人気投票について。

概要：この度、お気に入り件数が、50件を突破しました！

それを祝して、キャラクター人気投票をしようと思います。

見事一位になったキャラクターは、そのキャラクターを主人公に、

外伝を書こうと思います。

ので、

どんな外伝の内容がいいか書いて送っていただけると、それを使わせていただく可能性があります。

二・三位のキャラクターは活動報告にて、インタビューしたいと思います。

期限は2週間後の8月30日です。

応募方法：感想の一言のところ、

?好きなキャラクター名

?外伝は短編がいいか、連載がいいか
を書いて送ってください。

人じゃなくても結構です。ビュウ・ダイク・ブック (真の闇の書や、涼の鎌など)

たくさんのご応募、お待ちしております。

No. 23 旅立ちと暴風。

私たちは歩いている。
ここは草原。

昨日、城を出て、城下町の外れで一泊。
で、今、王都から一番近い、ツヴァイ地方に向かっているのだが。

……なぜに全員無言。

いや、普通話しながら歩くんじゃないの？
という以前に、

なぜに徒歩。

なんかさあ、馬車とかないわけ？ねえ？
徒歩って、地味に疲れるんですけど。
どうなってんの。
マジで。

全員を見渡す。

トウルム ニコニコしながら風景を眺めて歩いている。

バルト 下をむいて歩いていて、時折トウルムを見ては
ムツとした顔を浮かべる。

リーベ てちてち歩いている。

うーんリーベって、ぶりっこだと思ってたけど、素かもな。
っていうか、こいつのせいでスピードが落ちているな。

街で買った水晶に反重力魔法をかけて、と。

「リーベ、ちよつとこつちに来て。」

「?」

首にかけてやる。

「うわあ！ふわふわする！」

きゃっきゃ喜んでる。やっぱり素なのか……

さて、運びやすくなったところで、

ブラック・ストーム・ウィンド
「黒の暴風！」

「きゃあああああああ！！」

おお、一気に向こうに吹き飛んでいったぞ！

これでスピードの問題は解決だね。(ー)(ー) bグッ！

「おい！どうしたんだ！」

「ああ、バルト。リーベを風で運んだんだよ。」

「吹き飛ばしたの間違いだろう。」

なんだよ、トウルム。正しいこと言っなよ！

「急いで追っぞー！」

バルトは必死に、

トウルムはやれやれという感じで走る。

これからもこんな調子なんだろうか。

そう思うと、人知れず笑いがこみ上げてくる。

首洗って待つてるよ！魔王！

No. 23 旅立ちと暴風。 (後書き)

何か連載漫画のラストみたいになってしまった……
終わりませんよ！まだまだまだ！
あと1ヶ月は少なくとも頑張ります！

No. 24 ツヴァイ地方につきました。

「いやー長い道のりだった。」

「いやーじゃねえだろ！」

ここは、ツヴァイ地方への関所。

冒頭のセリフは私。次のはバルトである。

「お前のせいで走らされたんだぞ！」

「おかしいなあ、このへんにリーベがいるはずなんだけど……」

「俺の話を聞け！」

「番人に聞いてみるか。」

「トウルム！お前もか！」

さて、騒いでるバルト君はおいとして、

トウルムが言うように、番人に聞いてみましょう。

関所は門で、その横には三階建てぐらいの塔が立っている。

そこに番人こと、ツヴァイ地方関所番兼入場門番が、

二人暮らしているらしい。

ちなみに関所からはレンガ造りの壁が伸びている。

ツヴァイ地方を囲っているとか？

塔の門をコンコンと、叩く。

……返事なし。

今度はガンガン

……またも返事なし。

ダンダン

……返事なし。

よーし、そっちがその気なら、
スパッ
バタン。

「おいおい。」

「出ない方が悪い。」

「そういう言う問題じゃないと思うのだが。」

「まあまあ。」

「失礼しまーす。」

一階には誰もいないか。

じゃあ、奥の階段を上りましょう。

「勝手に上がるなよ！」

「大丈夫、問題ない。」

「どうして？」

「勇者だからさ。」

バルト！啞然とするな！

トウルム！なんで笑ってるんだよ！

「どうも。」

「うわ！誰だ！」

門番二人が私たちに武器を向ける。

一階はイスとテーブル、キッチンだけだったが、この階は、ベットがひとつとクローゼットが置いてある。多分、この二人のうち、どちらかの部屋なのだろう。あれ？ベッドの上に寝ているのは……

「リーベ？」

「お前、あの子を知っているのか？」
「仲間です。」

とりあえずリーベの近くに行きたいと言ったら、OKされた。

大丈夫か？こんなに人を信用して。

「おーい。」

「さっきから起きないんだよ。」

「いきなり何かがすごい勢いで門にぶつかったと思ったら、この子が倒れていてね。これを首から下げていたんだ。」

門番A（勝手に命名。）が差し出してきたのは、反重力の術を込めた水晶玉だった。が、完全に割れていた。おそらく門にぶつかった時の衝撃で割れたのだろう。

「ウーン」

「お、起きたね。」

「はっ、勇者さん。」

「「勇者？」」

「うん。勇者。」

門番二人に、身分証明証^{パスポート}を見せる。

下の備考欄に、

この者が異世界から呼び出された勇者であることを証明する。

エザリ国王 カリス・ド・エザリ

と、書かれていた。(もちろんサイン付き。)

「いやー大変だった。」

あのあと、全力で謝り、全力でもてなそうとする
門番さんをなだめなくてはいけなかったのだ。

「さて、王様に連絡するかな。」

宿屋の部屋(リーベと同室)で、私は通信用の手鏡を取り出した。

No.25 それぞれの今夜

涼

通信用の手鏡は、持ち手の部分に魔宝石がはめ込んである。

魔宝石とは、魔術を込めることに特化した石である。

通常の宝石では、込めた術は10〜50%ほど、威力が削られるが、魔宝石なら、ほとんどそれがない。

そのため、複雑な術を込めるのに、よく使用される。

値段はピンきりだが、どんなに安くても、銀貨一枚はする。

で、魔宝石に魔力を流し込む。

「ヤッホー。どうやら着いたみたいだねえ。」

おっさんの顔が鏡に映し出される。

「うん。」

「じゃあ、君がツヴァイ地方にいることを、

この領主に言っとくから。」

「え!?!」

私が勇者だってバレたら動きが取りずらくなる!

「ちよつと!」

「じゃあね。」

あのやるー!魔力を流し込むのをやめやがった!

ロサと領主

ダンダン ダンダン

(来た！)
領主は震えた。

三年に一度、“あれ”の返却を求めてやってくる。
今まではどうにか説き伏せてきたが、
今年こそ、もうだめかもしれない。

ダンダン　ダンダン

「今開けますから。」

領主はビクビクしながら、
鍵を開けた。

「返してもらいに来ました。」

黒いマントに身を包んだ女　　コルヴィスは静かに言った。

「とりあえず中に入ってください。」

領主はコルヴィスを、自分の部屋へと案内した。

「もう9年も待っているんです。

早く返してください。」

「おねがいです。まだあと3年待ってください。

あなたがたの寿命なら、15年なんてあっという間でしょっ？」

「それはあなたが言うことではありませんね。」

そう言いながらコルヴィスは立ち上がった。

「さよなら。」

コルヴィスは屋敷を出た。

(明日の夜だな。)
そう思いながら。

No. 26 それぞれの今夜？

私は領主の娘、リヒト・ジエダイド。

物語が好きで、本をよく読むの。

中でも一番好きなのは、おとぎ話！

特に、囚われのお姫様を騎士が助けに来るお話が大好きなの。

こんなに月の綺麗な夜は、私のために騎士が来てくれそう。

お父様は、今日は絶対にテラスへの窓を開けてはいけないうって言うていたけれど、

閉めていたら、迎えに来た騎士が困るわよね、

そう思った私は、窓を開けておいたの
すると、

ダンダン　ダンダン

誰かが怒ったようにドアを叩いている。

急に怖くなった私は、

ベットに潜り込んだの。

「起きてください。」

その声で私は目を覚ました。

いつの間にか眠っていたみたい。

横を見ると、仮面をつけたピエロが立っていた。

外は、まだ夜。

「あなた？私を起こしたのは。」

「ええ、そうです。」
「なんだ、迎えに来るのは騎士じゃないのね。」
「すみませんね、道化師で。」
「ニヤア」

その時私はピエロの足元の黒猫に、
初めて気がついた。

「黒猫なんて……あなたもしかして魔女？」
「いいえ、私はピエロです。」
「どうしてここに来たの？」
「あなたを連れていくためです。」
「どこに？」
「お城に。」
「本当？」
「嘘は言いません。」

私は少し考えてから、
「じゃあ、連れていって、お城に。」
「かしこまりました。お嬢様。」
ピエロは大げさなおじぎをし、
私を抱き抱えた。

「少し、眠っていてください。」
「それはどうということ？」
「夢テイバの怪物」

その声を聞いた瞬間、
私は深い眠りに落ちていった。

No. 27 領主は拳動不審。

「どうも、勇者様。私は領主のサキル・ジエダイトと申します。」
町についてから3日目の朝、
痩せた背の高いきらびやかな衣装をまとった男が
そう言ってきた。

私はおっさんに必死に回線をつないで、
勇者がいると伝えるのを1日待ってもらった。
その間にいろいろな買い物を済ますためだ。

勇者だと分かると、変に謙遜して物を売らなくなったり、
インチキ商品を買ってきたりする奴がいて、
思ったように買えないのだ。

で、今馬車の中。
結構揺れる。

まあ、下は石畳なわけだし、
クッション材もついていない車輪なので仕方ないが、
しゃべったら舌をかみそうだ。

車内を見回してみると、
領主 拳動不審。捕まると思う。

バルト 普通。面白くない。

トゥルム 普通。つまらない男。

リーベ 寝てる。おい！寝れるのかよ！

さて、つきました。お屋敷。

まあまあのでかさだな。

やっぱり城に比べると小さいが、
応接間に通された私たち。領主は拳動不審。

「で、なんのようなんです？」

声をかけた私を見、トゥルムたちを見、
決心はついた。とでも言うように、領主は口を開いた。

話の中身は娘を魔王軍に誘拐されたので、
取り戻して欲しいというものだった。

「どうして魔王軍だとわかるんだ？」

トゥルムの問いに、領主は答えた。

「それは言えません。」
と。

「言えない！？ふざけんな！」
いきなり大声を出した私に領主はひどく驚いているが、
そんなの関係ない。

「事情を聞いてみたら魔王軍のほう正しいかもしれないじゃないか！」

「あなたがたは魔王軍の肩を持つのですか？」

「いいえ、領主、そういうわけじゃないんです。」

ただ彼女は、全てに平等に有りたいと、そう言っているのです。
「トウルムがやんわりと言う。」

わかってると思うけど、私にそういう気は一切無い。
キョドキョド、オドオドした態度に腹が立って怒鳴ったまでだ。
だいたい、そんな聖人君主みたいなこと言ってる奴はたいてい悪人
だ。

歪んでるかもしれないが、事実だと思う。

「申し訳ないが、これだけは絶対に言えないのだ。」

「まさか、あんたが魔王軍の仲間じゃないでしょうねえ！」

「そんなことは断じてない！」

いきなり感情的になった。

心当たりがあるか、魔王軍に恨みがあるか、
声が裏返っているから多分、前者だろう。

「じゃあ、報酬は？」

「えっ。ほ、報酬？」

「当たり前でしょう？勇者ってのは便利屋じゃないんだからね。」
「……」

しばらく悩んだあと、領主はベルを鳴らした。
と、扉から女性が4人入ってきた。

髪の色も瞳の色も年齢さえバラバラな彼女たちの共通点、
それは、手の甲に入った刺青だった。

その刺青はこの世界のアリムという花

ユリによく似たその花の刺青は、奴隷であることを示している。

また、最低級の奴隷は足の甲に、最高級の奴隷は顔に
というように、その奴隷の価値が刺青の位置でわかる。
この奴隷たちは中の中といったところだろう。

「この中から一人を差し上げます。」

「いらない。」

「なんですと？」

「お金。金貨5枚。」

「それは余りにも高い。」

「娘さんが大事じゃないの？」

「……わかりました。」

「ここはどこ？」

木のベットの上で、リヒトは目を覚ました。

横を見ると、本棚。ぎっしりと本が詰まっている。

それでも溢れ出した本が、床の上に山積みになっていた。

しばらくして、彼女は退屈しのぎに一冊読もうと思いい、ベットの近くの一冊に手を伸ばした。そのとき、扉が開き、コルヴィスとリンクスが入ってきた。バツと手を膝の上に置くりヒト。

「お目覚めですか？」

「ええ。」

コルヴィスは本棚から一冊の本を取り、

「どうぞ。」

そういつてリヒトに勧めた。

その本は表紙にとても美しいペガサスの絵が描いてあり、それがキラキラと輝いていた。

思わず表紙を開くと、彼女が大好きなおとぎ話の短篇集だった。

半分ほど読んだところで一度コルヴィスの方を見ると、彼女もまた、本を読んでいた。しかも横には3冊ほど積み重ねられている。

（なんて読むのが早いのかしら。）

彼女は本の続きを読み始めた。

No. 29 たこ焼き器な森

今私たちは町外れの森の中にいる。

このへんに魔王軍の隠れ家があるという情報をキャッチしたからだ。で、魔法で分身を作り、活用しつつ、しらみつぶし中。

「何も見つからないなあ。」

鎌で道の邪魔な草を切り裂きつつ、進んでいく。

おかげで後ろに道ができていく。

……何かこんな詩あったなあ。

「私の前に道はない、私の後ろに道はできる」

思わず声に出してしまうのは一人の寂しさからだろうか？

で、しばらくザクザク歩いていると、

「!」

落ちた。穴に。

高さは3メートルくらい。

結構高い。

「あー」

登れないように穴の中がツルツルしている。

この穴を掘ったやつはどうやって上がったんだろっ？
ってそれより連絡連絡。

それぞれの近くに私の分身をつけておいたので、
彼らに連絡してもらおう、すると、

こっちも穴に落ちた。 トウルム
只今落とし穴に苦戦中 バルト
助けてくださいーい！！ リーベ

おい。これは敵の罠か！？罠なのか！？
つーか全員落つこちるとかどんな仲良し四人組だよ！

「分身^{ドッペル}」

さて、分身を穴の外に出現させて、こっちに向かわせ

ズボッ

おいしいいいい！

何で！？何で！？

脱出した。今そっちに向かわわ！ バルト

落ちたんだな。

私は5回上がったが1メートル程先の物に
6回落ちたので、もう諦めた トウルム

マジですか。

どうしようかなあ、
うーん

No.29 たこ焼き器な森 (後書き)

話、全然進んでないですね。

次回、コルヴィスと会うはずですが。

No.30 マジですか。

……私って馬鹿かも知んない。

さつさと反重力魔法使えばよかった。

エア・ウィング
「空気の羽」

なんか足元に何もないうって新鮮。
下を見なければどこまでも落ちていきそうで怖い。

「上昇気流 (ヴァティカル・プドラフト)」

一気に穴の外まで移動。

このまま、

ブラック・ストーム・ウィンド
「黒の暴風」

真横に移動。

木々なんかにあたらないように自分の体をガードしつつ、
魔王軍の隠れ家を探す。

と、古ぼけた木こり小屋を発見。

「あそこだね。」

より勢いを強めた瞬間、

魔法が解けて私は地面に足を付ける。

「あなたがリヨウさんですね？」

「ええ、そうだけど、あんた誰？」

ふっとピエロの格好をしたものが現れる。

半仮面と中性な声のせいで男か女かはわからない。

「私は魔王軍兵士団団長、コルヴィスと申します。
以後お見知りおきを。」

仰々しくお辞儀をするコルヴィス。

そこからは一遍の悪意も殺意も見受けられない。

「領主の娘さんを返してもらいに来た。」

「領主の娘？」

コルヴィスが顔を曇らせる。

「あなたが攫った子のことだよ」

「あの領主がそういったんですか？」

「ああ。」

「お嬢様は魔王様のお子さんですよ？」

「へ？」

No.30 マジですか。(後書き)

結局戦闘シーンまで行けなかった……
次回こそは必ず！

人気投票終了しました。

投票してくださった皆様、ありがとうございます。

涼・ケリル・トゥルムが同列一位だったので、

外伝を書こうと思います。

ただ、涼の短編はちよつと他と違ったものになるかもしれません。

あなたの好きなキャラ大募集！

人気投票は終了しましたが、

この度お気に入り件数が70件を超えました。

別にそんな期限とか決めなくてもいいんじゃない？

と思ひまして、応募内容は、

？好きなキャラクター名

？外伝がいいか、インタビューがいいか、

？もし外伝なら、短編がいいか、連載がいいか

外伝の内容や、インタビューの質問内容などを送っていただくと、
それに従います。

期限は無期限です。

人じゃなくても結構です。(真の闇の書ビュウ・ターク・ブックや、涼の鎌など)

外伝・インタビューは『魔王になりたい外伝』あなたの要望に応
えます』という内容で投稿する予定です。

よろしくお願ひします。 > () <

「ですから、お嬢様は魔王様のお子さんだと言っているのです。」
「じゃあなんで領主なんかのところにいるわけ？」
「一応お嬢様なんだし、魔王城にいて然るべきなのに。」

「お嬢様は領主の息子と仲が良かったのですが、
12年前、その息子が死んだのです。
嘆き悲しんでいる領主とその妻を慰めるために、
三年という約束でお嬢様は領主の娘として生きることにしたのです。
その際、魔王様の娘としての記憶を封印なされたのですが、
それをいいことに領主がお嬢様のお帰りを先延ばしにし続けたので
す。
それでさすがにこれ以上は待てないと、強硬手段に出たのです。」

「へえ。」

あの領主の挙動不審はそのせいか。

「ロサと対等に戦ったあなたとは是非一度手合わせ願いたいのです
が、
今は急いでいるので、ここは見なかったことにしてもらえませんか？
しょうか？」

「やだ。」

私は即答した。

「何故ですか？今の説明でご理解いただけたと思ったのですが。」
「あんたの言ったことは嘘。」
「嘘偽りは一切申しておりません。」
「でも嘘なの。」

「どうしてですか？」
ちよつとイライラしているようだけど、そんなの知ったこつちゃない。

「あんたの言ってることがほんとだと私が得しないから」
「コルヴィスはひどく動揺している。仮面越しでも困惑しているのがよくわかる。」

「あなたは勇者ですよねえ？」
「だから？」

「勇者は代々、清く正しいものじゃないんですか？」

「代々？私の前にも勇者がいたの？」

「ええ、4人ほど。」

「ふうん。ま、いいや。私は自分が魔王になるために魔王を倒すの。」

「正気ですか!？」

「当たり前でしょう？安心して、あなたも私の死霊兵にしてあげる。」

「丁重にお断りします。」

彼女がナイフを構える。

「ちえっ、つまんないの。」

私も鎌を構える。

キンッ

飛んできたナイフをはじき飛ばす。

キンキンキンッ

連続して何本も飛んでくる。
弾ききれなかった一本が頬をかすめ、血がたらりと流れる。
やばいな、強い。

「影レリエルの使役！」
「アルミサエル実態の使役！」

無効化だと！？

しかも光系！？

おいおい、どうなってんだよ！

魔術は無効化、武力はあっちの方が上。
まるつきりチートじゃん！

No.32 お互い様？

「あんたの属性は光なわけ？」

「ええ。」

ナイフを弾きつつの会話。

遠・中距離はむこうの方が上手なので、
徐々に近づいていく。

ブラック・デヴァイン

「黒の加護」

ソーンツェ・アロー

「光の矢」

張ったシールドが壊される。

壊された瞬間に斜め右に逃げて、

ヘル・ファイヤ

「地獄の炎！」

ヘブン・ウォーター

「天国の聖水」

炎の消火とともに斜め左によける。

キーン

澄み切った音が当たりに響く、

私の鎌をコルヴィスがナイフで受け止めたのだ。

そして、私の後ろから私 本体が飛び出る。

「分身！？」

「ああ、そつだよ！」

思いつきり鎌を振り、分身ごとコルヴィスの首を切る。
と、揺らいで静かに消えてしまった。

ミラージュ

「塵気楼か……」

光属性での分身である塵気楼。

おそらく本体はもう魔王の娘を連れて逃げているところだろう。

「ちっ
」

しょうがない、バルトたちを助けに行くか。

No.33 えっ、恐喝？嫌だなあ、取引ですよ、取引。

「と、言う話を聞いたんだけど……」

ここは領主の豪邸の応接室。

コルヴィルから事情を聞いた私はそれをリーベ達に話し、領主を呼び出し、現在に至る。

「そ、それは、全く、こ、心当たりが、あ、ありませんな。」

どんだけ分かりやすい反応してんだよ！

100%事実だろ！

と、言うツツコミは置いておいて……

「そう、じゃあ、このことをエザリ国王に報告するから。」

「え！エザリ国王に!？」

「心当たりが無いのなら平気でしょう？」

「も、もちろんですとも。」

めっちゃ汗かいてるし。動揺しすぎだろ。

「もしも仮に嘘をついていた場合、今の地位を剥奪、

酷ければ死刑かも、でもまあ、一片の心当たりも無いなら関係ない

ですよね？」

「すみませんでしたあー!!」

土下座!? この世界にもあつたんだ。

「顔を上げてください。私はただ真実が知りたいだけなのです。」

「ゆ、勇者殿。」

領主は既に涙目だ。

「さあ、全てを話してください。」

「それから20分後」

「と、言つわけなのです。」

「なるほど。」

領主が言ったことはコルヴィスの言ったことそのままだった。

どうやら二人とも嘘が付けられない人種だと見てよさそうだ。

「それでは、金貨5枚を……」

「いやいや、依頼は成功できなかったのですから、お金はいりませ
ん。」

「さて、取引をしましょうか。」

「どういうことですか？」

「さっきのあなたの告白を記録した記録用魔術器具があります。

これを金貨10枚で買っていたきたいのです。」

「えっ？」

「ちなみに買っていたただけなかった場合、この国の報道機関に売
ります。」

「そっそんな!」

「嫌でしたら買ってください。」

「しかし、金貨10枚は高すぎる、せめて金貨9枚にしていただけ
ないか」

「値切れると思ってるんですか？」

「……わかりました。買います。」

「毎度ありがとうございます。」

えっ、恐喝？嫌だなあ、取引ですよ、取引。

No.33 えっ、恐喝？嫌だなあ、取引ですよ、取引。（後書き）

間が空いてすみません。

しかし非道だわ、やっぱりいつ。

No. 34 閑話休題 主人公紹介

> i 2 8 8 7 9 — 3 4 9 2 <

名前：邑闇 涼

年齢：18歳前後

詳細：この物語の主人公。話は主に彼女視点で語られる。チートで最強で外道。

魔力、戦闘力が半端ない。敬語を使うときは使ったほうが自分の得になる時と、何か企んでいるとき。

人や生き物を殺すことに快感を感じ始めてる。キチガイ直前。けど多分永遠に直前のまま。

元の世界でかなり辛い過去を背負っている。ので、帰る気はさらさららない。

万物の命を狩ることのできる女の生まれ変わり。

自分の身長よりでかい鎌を自由自在に操る。

魔法はほとんど闇系。

目的：魔王討伐後、自らが魔王となり、世界を手に入れる。

No. 34 閑話休題 主人公紹介 (後書き)

イラストは横山 楓さんに描いていただきました。
本当にありがとうございます！

No. 34 閑話休題 敵キャラ1紹介

> i 3 0 0 3 9 — 3 4 9 2 <

名前：ロサ・テネブラエ

年齢：25歳前後

詳細：魔王軍騎士団、団長。魔王軍三大幹部の一人である。魔力は一般人レベルだが、剣の扱いに長けている。漆黒の剣を持ち、漆黒の鎧をまとった騎士。常に的確な指示をし、時たま参謀としても活躍する。

いつもは冷静だが、魔王を侮辱されたり、魔王に危害を与える者を発見したりしたときは、徹底的に叩き潰す。魔王のために感情的になることもしばしば。

目的：魔王様のために戦うこと。

No.34 閑話休題 敵キャラ1紹介(後書き)

こちらのイラストも横山 楓さんに書いていただきました。
本当にありがとうございます！

No. 36 閑話休題 魔王紹介

> i 3 0 1 5 2 — 2 1 0 <

名前：魔王

年齢：三桁以上であることは確か。

詳細：魔王軍のトップ。涼が成り代わろうとしている相手。

魔力は世界一。小さな国を一日で打ち滅ぼせるほどの戦闘力があり、その昔、栄華を極めた王国を陥れた知略も持っている

また、彼の一番痛い所は、自らが心を許した部下や娘のためなら迷わず命を捨てることではなく、それを当たり前だと思っているところである。

目的：「世界を手に入れること」

No.37 閑話休題 敵キャラ2紹介

> i29112 — 291 <

名前：モンド・ヴァイス

年齢：25才くらい

詳細：無口。彼の八割はこの二文字で説明できる。
しゃべる前に必ず『……』がつく。

魔王軍魔術師団団長。本人の魔力も半端ない。
主に幻術、洗脳など、精神面への攻撃が得意。

物理的攻撃はあまり得意ではなく、免疫もない。
しかし、それを補ってあまりあるほどの魔力と知識がある。

魔王のために戦うが、魔王のために命はかけない。

目的：「生きること」

No.38 閑話休題 敵キャラ3紹介

名前：コルヴィス（姓はない）

年齢：20才くらい

詳細：魔王軍兵士団団長。率いる部下の数は他の二人に比べて圧倒的だが、

あまり戦場で指示を出すことはない。

だって部下は皆、雑魚だから（笑）。

魔王に忠誠を誓っており、光魔法の使い手。

魔法とナイフを半々くらいで使う。

黒い鎌の女の手記や古い歴史書の解読を行なっている。

大量の本は趣味。ちなみにNo.28のような隠れ家はいくつかあり、

その一つ一つに、彼女の本が置かれた部屋がある。

全部2回以上読了済み。

ちなみに三大幹部は全員仲が良く、

No.22のようにお互いの部屋で飲むことも多々ある。

たまにいつの間にか魔王も参加していることがある。

目的：「魔王様を手伝う」

No.38 閑話休題 敵キャラ3紹介(後書き)

久々の更新です。

人物紹介が終わったら涼や、三大幹部の過去の話に行こうと思いますので、

しばしお待ちください。 > (((<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0269v/>

魔王になりたい

2011年10月18日23時53分発行